小学生と中学生の自尊感情に関する研究

Self-esteem of elementary school and junior high school students

小　島　道　生

岐阜大学教育学部
KOJIMA Michio

要　旨

本研究は，小学生と中学生の自尊感情を測定する尺度を開発し，自尊感情の特徴と自己評価との関係について明らかにすることである。対象児は，通常学級に在籍する小学４年生～６年生612名と中学生１年生～３年生169名である。対象児に対して，アンケート調査により自尊感情と自己評価の測定が行われた。その結果，自尊感情の尺度については，内的整合性の高さが確認され，「全体的な自己価値感」と「自信」から構成されていることが明らかとなった。そして，「全体的な自己価値感」と「自信」に共通して，小学４年生から中学生にかけて徐々に低下していくことが示された。ただし，「全体的な自己価値感」は中学１年生～３年生で低い水準でとどまっているのに対して，「自信」の方は中学２年生が最も低く，中学３年生になると高くなる傾向が認められていた。自己評価との関係については，小学生と中学生に共通して，「全体的な自己価値感」に運動は影響を及ぼしていなかった。また，中学生においては学業や友人関係よりも，容姿が自尊感情に影響すると考えられた。

キーワード

自尊感情，自己評価，小学生，中学生

Ⅰ．問題と目的

自尊感情とは，自分自身のことを価値ある存在と認識することである。これまで，青年期や成人期を対象として数多くの研究が取り組まれてきた。日本における自尊感情に関する心理学的な研究では，主にRosenberg (1965) の尺度を日本語訳した項目が採用されてきた。ただし，Rosenberg (1965) の尺度は，抽象的な内容を含んでおり，小学生に適用するには困難と考えられる。

そんななか，東京都教職員センター (2011) では，小学生をも含めた児童・生徒の自尊感情を測定する尺度を開発した。その尺度は，「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」という因子から構成されており，他者や将来に関する項目も含まれており，合計22項目からなる。そして，東京都教職員センター (2011) では，小学生～高校生にわたる自尊感情の特徴について報告している。その報告によれば，小学１年生から中学１，２年生にかけて徐々に低下することや，特に小学校高学年から中学校１年生の低下率が大きいことが示されている。また，中学校３年生では若干上向きになることを報告し，この傾向は教師との関係や学習への意欲，進路意識の変化と似ていると述べている。

その他に，日本においても小学生を対象とした自尊感情は，複数報告されている。例えば，中山・西山・柳澤（2011）は，日本の小学生に適用可能な領域別の自尊感情尺度の作成を試みている。その結果，因子分析では全学年にわたって比較的安定した因子構造が得られ，想定された「学習」「社会」「運動」「家族」の各領域における自尊感情を，小学生が良く弁別できていることが確認された。また，各領域における自尊感情得点の信頼性は，１年生をのぞいておおむね許容できるレベルに達していたことなどを報告している。市川・小島・井澤（2011）も，小学４年生～６年生を対象とした自尊心の尺度を作成した。その結果，「自分認識」「友だち」

「家族」「比較願望」「学業」の５因子が抽出され，内的整合性，内容的妥当性，構成概念妥当性が証明されたことを報告している。また，各因子の性差と学年差についても検討され，「自分認識」と「比較願望」について性差が認められた。ただし，今後の課題として，開発された尺度は，どちらかというと全般的な領域を扱っているというよりも，特定の領域を扱っており，自己評価的要素を含んでおり，本来の自尊感情の概念からすると課題が残ると報告されている。したがって，小学生を対象としたより全般的な領域を扱う自尊感情の尺度開発の必要があると考えられる。

ところで，近年の自尊感情に関する研究では，自尊感情の高低だけでなく，自尊感情の揺れについて考慮された研究が多く取り組まれている。自尊感情の揺れについては，自尊感情が高くても，不安定であれば，安定している人よりも，怒りや敵意を抱きやすかったり（Kernis, Grannemann, & Barcaly, 1989），抑鬱（Kernis, Grannemann, & Mathis, 1991）が高いことなどが示されている。このように，自己概念の高低だけでなく，安定性を考慮していくためには，学校教育現場においても定期的に子どもの自尊感情について調査を実施し，その変化について把握していく必要性があると言える。そのためには，学校教育現場において，比較的短時間で実施しやすい自尊感情尺度の開発が求められよう。中山ら（2011）も，同一の尺度を繰り返し実施することから，項目数が多すぎたり，内容が複雑すぎるような場合，児童が調査自体に否定的態度を形成し，その結果，回答が不正確になってしまう恐れがあると指摘している。

日本で取り組まれてきた小学生を対象とした自尊感情に関する研究では，全般的な自己価値感を測定するという自尊感情の概念からやや関係性が低いと考えられる項目から構成されるなど，課題が残されていた。また，質問項目も一部の先行研究（市川・小島・井澤，2011）では33項目と小学生に対して，やや多かった。そこで，本研究では，小・中学生を対象として，比較的質問項目が少なく，領域別に測定するのではなく，全般的な自己価値感に焦点をあてた自尊感情尺度の開発を試みる。

また，自尊感情については，領域別の自己評価が影響を与えていると考えられ，学業領域，運動領域などさまざまな領域との関係性について検証されてきた。自尊感情と，具体的な細部の領域を尋ねる自己評価との関係性について検討することは，自尊感情にどのような領域が，より強く影響を与えているのか明らかにできると考えられる。そこで，本研究においても，開発した自尊感情の尺度と自己評価との関係についても検討し，自尊感情に影響を与える自己評価の要因について，小学生と中学生による違いについて明らかにする。

Ⅱ．方法

１．対象児

A県内A市の２校の通常学級に在籍する小学４年生～６年生633名（小学４年生216名，小学５年生228名，小学６年生199名）と１校の中学１年生～３年生185名（中学１年生53名，中学２年生67名，中学３年生65名）を対象とした。そのうち，自尊感情の選択項目に記入がなされていた小学生612名（小学４年生204名，小学５年生216名，小学６年生192名）と中学生169名（中学１年生40名，中学２年生67名，中学３年生62名）を分析対象とした。

なお，自己評価との関係については，自己評価の選択項目に記入がなされていた小学生517名（小学４年生164名，小学５年生197名，小学６年生156名），中学生147名（中学１年生31名，中学２年生62名，中学３年生54名）について分析対象とした。

２．調査時期

2012年６月～７月にかけて実施された。

３．調査手続き

アンケート調査については，担任の教師から一斉に配布して実施された。質問紙用紙の表紙に，答えにくい質問には，答えなくてもよいことを記載するとともに，担任の教師からも，その旨説明がなされた。

4．調査内容

自尊感情の測定は，Rosenberg (1965) の尺度を日本語訳した山本・松井・山成（1982）の項目を参考に，小学生4年生以上であれば回答できるように，また否定的な表現をなるべく肯定的な表現へと一部修正を行った。そして，10項目から構成される自尊感情の尺度が作成された。

次に，予備調査として，教職10年以上の小学校教師3名を対象に，内容的妥当性について2件法による検討を依頼した。その結果，一部の質問項目について修正及び削除が実施された。最終的に，合計8項目からなる質問項目が作成された。

自己評価の測定は，先行研究（Tanaka, Wada, & Kojima, 2005；佐藤・赤坂，2008）を参考に，学業，運動，友人，外見の4領域から構成される質問項目を作成した。自己評価の質問項目は，学業11項目，(例；「わたしは，漢字を覚えることが好きだ」）運動3項目（例；「わたしは，泳ぐことが得意だ」），友人3項目（例；「わたしは，友だちがたくさんいる」），外見2項目（例；「わたしは，かっこいい（かわいい）と思う）の4領域で合計19項目で構成されている。

自尊感情と自己評価の回答方法は，とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法である。

なお，調査時には，これら質問項目の他にソーシャルサポートについて尋ねる質問が含まれていた。

5．分析方法

自尊感情及び自己評価の質問紙ともに，4件法の回答に基づき，「とてもそう思う」に4点，「少しそう思う」に3点，「あまりそう思わない」に2点，「まったくそう思わない」に1点に得点化された。

Ⅲ．結果

1．質問項目の精選，因子構造及び内的整合性

自尊感情の質問項目の精選として，各項目を除外した際のクロンバックのα係数を算出した。その結果は，Table 1の通りである。α係数の算出により，質問項目を削除した方がα係数が高い質問項目はなかった。質問紙全体のα係数は0.9064であった。

Table 1　各項目を削除した場合のα係数

項　目	削除時のα
1 わたしは，自分のことが好きだ	0.8955
2 自分には，いいところがある	0.8879
3 自分は，役に立つ人間だとおもう	0.8907
4 自分は，大切な人間だ	0.8922
5 わたしは，今の自分に満足している	0.9015
6 わたしは，がんばればなんでもできる自信がある	0.8956
7 わたしは，苦手なこともできるようになる自信がある	0.8937
8 わたしは，新しいことに挑戦する自信がある	0.8979

自尊感情の質問項目において，小・中学生のデータをまとめて因子分析（主因子法，バリマックス回転）した。共通性はSMCで推定し，固有値（基準値を1以上とした）の落差，単純構造，解釈可能性の高さを考慮し，因子数は2が妥当と考えた。

第1因子は，「自分にはいいところがたくさんある」「自分は大切な人間だ」といった全体的な自己価値感に関する内容であるため「全体的な自己価値感」と命名した。第2因子は，「わたしは，苦手なことでもできるようになる自信がある」「わたしは，なんでも自信をもっている」といった自信に関する内容であったことより「自信」と命名した。

各因子ごとの内的整合性について検討するために，クロンバックのα係数を算出した。その結果，第1因子「全体的な自己価値感」は0.8834で，第2因子「自信」は0.8578であった。

2．自尊感情の発達的変化

自尊感情の発達的変化について検討するために，各因子ごとに小学4年生〜中学3年生の平均得点及び標準偏差を算出した。その結果は，Fig. 1，2の通りである。

第1因子「全体的な自己価値感」の得点について，1要因の分散分析を行ったところ，有意

であった（F(5,775)=15.28, p<.01)。LSD法による多重比較の結果，小学４年生は小学６年生～中学３年生よりも高く，小学５年生は中学１，２，３年生よりも高く，小学６年生は中学１，２，３年生よりも高かった。したがって，小学４，5年生では有意差はないものの，６年生で得点が低くなり，中学１年生においてさらに低くなり，中学１～３年生は最も低いことが明らかとなった。

第２因子の「自信」の得点について，１要因の分散分析を行ったところ，有意であった(F(5, 775)=11.15, p<.01)。LSD法による多重比較の結果，小学４年生は小学５年生～中学３年生よりも高く，５年生は中学２，３年生よりも高く，６年生は中学２年生よりも高く，中学１年生は２年生よりも高かった。したがって，小学４年生は最も高く，次に５年生，６年生，中学１年生，中学３年生の順で，中学２年生が最も低かった。

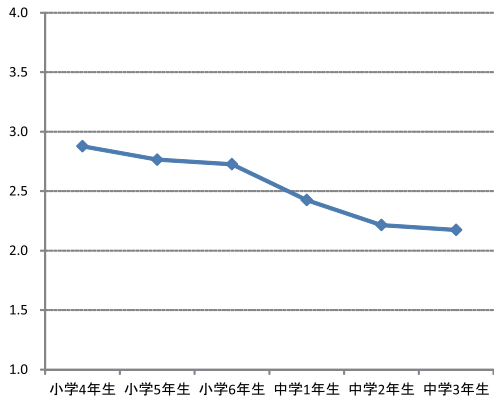

Fig.1「全体的な自己価値観」の平均得点

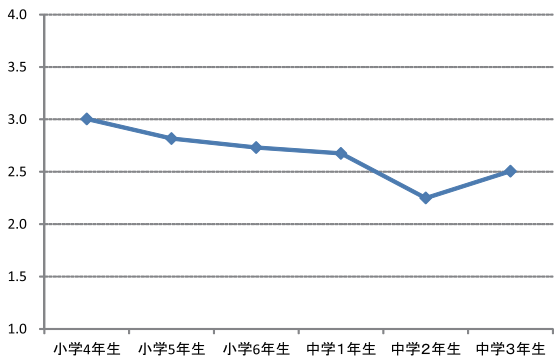

Fig.2「自信」の平均得点

３．自尊感情と自己評価との関係

自尊感情の得点について，「全体的な自己価値感」と「自信」を目的変数，自己評価の４つの領域を予測変数として重回帰分析を実施した。なお，対象児については，小学生と中学生にわけた。

その結果，小学生の「全体的な自己価値感」を目的変数とした際の学業の偏回帰係数は0.2793（両側検定：t(512）=7.27, p<.01)，運動の偏回帰係数は0.002（両側検定：t(512)=0.22, p>.05)，友人の偏回帰係数は0.1258（両側検定：t(512)=9.59, p<.01)，外見の偏回帰係数は0.1202（両側検定：t(512)=6.20, p<.01）であった。このときの回帰式全体の説明率はR^2=0.5230であり，有意であった（F(4,512)=140.37, p<.01)。

小学生の「自信」を目的変数とした際の学業の偏回帰係数は0.0394（両側検定：t(512)=8.42, p<.01)，運動の偏回帰係数は0.0432（両側検定：t(512)=4.58, p<.01)，友人の偏回帰係数は0.1040（両側検定：t(512)=7.57, p<.01)，外見の偏回帰係数は0.0977（両側検定：t(512)=4.82, p<.01）であった。このときの回帰式全体の説明率はR^2=0.5355であり，有意であった（F(4,512)=1478.58, p<.01)。

中学生の「全体的な自己価値感」を目的変数とした際の学業の学業の偏回帰係数は0.0213（両側検定：t(142）=2.57, p<.05)，運動の偏回帰係数は-0.0551（両側検定：t(142)=-2.40, p<.05)，友人の偏回帰係数は0.1106（両側 検定：t(142)=4.52,p<.01)，外見の偏回帰係数は0.3009（両側検定：t(142)=8.42, p<.01）であった。このときの回帰式全体の説明率はR^2=0.5434であり，有意であった（F(4,142)=42.25, p<.01)。

中学生の「自信」を変数とした際の学業の学業の偏回帰係数は0.0017（両側検定：t(142)=3.26, p<.01)，運動の偏回帰係数は0.0017（両側検定：t(142)=0.06, p>.05)，友人の偏回帰係数は0.1086（両側検定：t(142)=3.56, p<.01)，外見の偏回帰係数は0.1484（両側検定：t(142)=3.34, p<.01）であった。このときの回帰式全体の説明率はR^2=0.3662であり，有意であった（F(4,142)=20.51, p<.01)。

Ⅳ．考察

１．質問項目の精選，因子構造及び内的整合性

質問項目の精選を行ったところ，全ての質問項目が採用された。また，因子分析の結果，「全体的な自己価値感」と「自信」という２因子が抽出された。したがって，本研究で作成した自尊感情の２因子から構成されていると考えられる。これら２因子は，いずれも全体的的な自己価値感や自信に関する内容であった。自信に関する項目については，バンデューラ (Bandura, 1977) の提唱した自己効力感と同義の概念と考えられよう。したがって，本研究の第２因子については，自尊感情というよりも，むしろ自己効力感に類似した概念であったから，独立した因子として抽出されたと考えられる。

内的整合性について検討したところ，第１因子と第２因子ともに，高い値が報告された。したがって，本研究における自尊感情の質問紙については，高い信頼性が確保されたと考えられる。

２．自尊感情の発達的変化

自尊感情の発達的変化について検討したところ，「全体的な自己価値感」については，小学４年生から中学１年生にかけて徐々に低下しており，中学３年間で低い状態が続いていることが明らかとなった。このように，自尊感情が小学校高学年から中学生にかけて低下するという，およその傾向については先行研究 (Simmon, Rosenberg, & Rosenberg, 1996) と一致している。ただし，東京都教職員センター (2011) の報告では，本研究とは異なる点として，小学生から中学１年生にかけて下がった自尊感情は，中学３年生になり，いったん上がることが報告されていた。こうした自尊感情の発達的変化に関する違いの原因については，そもそも自尊感情を用いた尺度が異なっていることなども影響しているかもしれないが，本研究結果からは明らかにはできない。

青年期の自尊感情の発達的変化については，縦断的な研究から学年とともに自尊感情が低下するという傾向が示されているものの，その変化には一貫して高い群，一貫して低い群，徐々に低下していく群，中程度で上昇していく群の４群が存在していることが示されている (Zimmerman, Copeland, Shope, & Dielman, 1997)。本研究では，横断的な研究のため，こうした4群の存在については明らかにできないが，小学高学年から中学生にかけて自尊感情が単純に低下していくというよりは，いくつかの発達的変化の道筋が存在していると考えられ，今後の検討課題といえよう。

「自信」についても，小学４年生は最も高く，中学生にかけて徐々に低下していく点については，「全体的な自己価値感」と類似した傾向であった。ただし，「自信」については，中学２年生が最も低くなっている点が異なっていた。戸田 (2008) は，自己効力感の発達的変化について，自尊感情などと同様に，能力や行動の結果を相対的に評価できるようになるにつれ，「自分自身がとらえた自己効力感」は全体として下降するのではないかと推測される，と指摘している。本研究においても，こうした指摘と一致した傾向を示している。中学２年生が最も低くなり中学３年生になると改善するという変化については，東京都教職員センター (2011) が自尊感情に関する発達的変化で考察していたように，中学３年生になると進路に対する意識の変化などから，自分自身に対する自信が回復する傾向になるのかもしれない。

３．自尊感情と自己評価との関係

「全体的な自己価値感」と自己評価の各領域との関係について重回帰分析により分析を行ったところ，小学生では全体的自己価値感に及ぼす学業と友人，外見の効果は有意であるが，運動の効果は実質的なものであるとは言えないことが明らかとなった。また，自信に及ぼす学業，運動，友人，外見の効果は有意であった。

中学生では，「全体的な自己価値感」に及ぼす学業，友人，外見は有意であり，運動に関しては負の相関が認められた。自信に及ぼす学業，友人，外見は有意であるが，運動の効果は実質的なものであるとは言えないことが明らかとなった。

これらより，小学生と中学生に共通して，

「全体的な自己価値感」には，運動は影響を及ぼしていない，むしろ中学生においては負の相関すら認められることが明らかとなった。先行研究（眞榮城，2005）においては，自己受容感には容姿が大きく影響することが示されている。本研究においても，特に中学生において，そのような傾向が認められていた。したがって，中学生においては学業や友人関係よりも，容姿が自尊感情に影響すると考えられる。

「自信」については，小学生では全ての領域が影響を及ぼしている一方で，中学生では運動以外の領域が影響を及ぼしていることが明らかとなった。中学生になると，自信においても，自己価値感と同様に，運動の影響は認められていないと言えよう。

Ⅴ．今後の課題

本研究により，小学高学年と中学生を対象とした自尊感情を測定する尺度は開発されるとともに，その特徴が明らかになった。ただし，自尊感情の発達的な変化については縦断的な研究により，その安定性と影響要因も含めて，さらなる詳細な検討が必要になろう。また，小学校高学年の児童にとって，家族関係における自尊感情が直接全体的自尊感情に影響を与えていることも示されており（加藤・西，2010），今後は自尊感情への影響要因として，家族関係も考慮して検討すべきであろう。

文献

Bandura, A. (1977) Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review,* 84, 191-215.

市川令子・小島道生・井澤信三（2011）通常学級に在籍する小学４年生～６年生を対象とした自尊心尺度の開発-発達障害児への適用を視野に入れて-. 兵庫教育大学　特別支援教育コーディネーター研究，7，57-63.

加藤佳子・西　敦子（2010）小学生の家族関係および友人関係における自尊感情と全体的自尊感情との関連．日本家政学会誌，61，11，741-747.

Kernis, M.H., Grnnemann, B.D., & Barclay, L. C. (1989) Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and social Psychology,* 56, 1013-1022.

Kernis, M. H., Grannemann, B.D., & Mathis, L. C. (1991) Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personaltiy and Social Psychology*, 61, 80-84.

眞榮城和美（2005）自己評価に関する発達心理学的研究．風間書房.

中山勘次郎・西山康春・柳澤　登（2011）児童用自尊感情尺度の検討．上越教育大学研究紀要，30，63-74.

Rosenberg, M. (1965) *Society and The Adolescent self-image.* Princeton Universtiy Press.

佐藤正恵・赤坂映美（2008）ADHD児の自尊感情とそれに影響を及ぼす要因について．LD研究，17(2)，1414-151.

Simmouns, R.G., Rosenberg, F., Rosenberg, M.(1973)Disturbance in the self-image at adolescence. *American Sociological Review,* 38, 553-568.

Tanaka, M., Wada, M., & Kojima, M.（2005）A study of Japanese version of the scale for the self-cognition in childhood and early adolescence. 東北大学大学院教育学研究科研究年報，54(1)，315-337.

戸田まり（2008）児童期における自己の発達．自己心理学２　生涯発達心理学へのアプローチ．榎本博明・岡田努・下斗米淳（監修），榎本博明（偏），175-188，金子書房.

東京都教職員研修センター（2011）自信　やる気　確かな自我を育てるために　子供の自尊感情や自己肯定感を高める指導資料【基礎編】.

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造.教育心理学研究，30，64-68.

Zimmerman, M., Copeland, L., Shope, J., & Dielman, T.(1997) A longitudinal study of self-esteem : Implications for adolescent development. *Journal of Youth and Adolescence*, 26, 117-142.